

令和3年度 関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・分析業務
業務実施報告書

団体名	特定非営利活動法人 自伐型林業推進協会
事業名	持続的な森林経営と地域産業の兼業化による生業(なりわい)の創出

1 事業概要・主な成果

1.1 事業概要

(1) 本事業は、災害に直面した中山間地域を舞台に、森林資源を活かし、複数の仕事をかけ合わせた「半林半 X」の生業を作り出し、都市住民からの UI ターン者等が地方に向かう機会を創出する事業である。

(2) 具体的には、2014 年(平成 26 年)に「まち・ひと・しごと創生本部」の指針にも記載された「自伐(じばつ)型林業」を軸に、小規模農業等を組み合わせた生業を構築し、各地で就業者を 5 人以上創出させ、その支援体制を構築(地域推進組織を設立)する。

(3) 経済的に持続可能な暮らしの確立を軸に据え、都会からの UI ターン者が研修やワークショップでの交流によって、「半林半 X」の新たなライフスタイルの多様性をさらに引き出す。そして、災害に強い森林管理手法の地域モデルを全国に示す。

1.2 主な成果

(1) 事業の目標。達成状況

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	フォーラムおよび災害現場参加者 100 人(4 地域合計 400 人)	地域平均約 130 人(3 地合計 約 380 人) +視察会参加約 40 人 (+オンライン視聴 6,350 回)
2	研修参加者 20 人(フォーラム・災害地視察者の 2 割/合計 80 人)	合計 92 人(のべ 173 人)
3	ステップアップ研修 10 人(研修参加の半数/合計 40 人)	合計 15 人
4	各地 4~5 人が自伐型林業者(半林半 X 実践者)のメンバーとして「地域推進組織」を組織する	2 地域で「地域推進組織」の役割を担う団体が活動を始めた。

(2) その他の成果

●フォーラム、視察、研修という流れが出来上がったことで、地域と一度関わりを持ち始めた人を取りこぼさない仕組みが生まれるとともに、「自伐型林業」が地域に根ざし、林業×副業(半林半 X)の中山間地の「生業」パターンが 15 以上の事例として現れた。

●自治体が地域外からの担い手育成と関係づくりに取り組む

フォーラムと研修を重ねたことで自治体が予算化してこの事業を行うようになった(熊本県美里町/熊本県五木村や宮城県丸森町でも検討中)。

●企業が関係人口と SDGs の森づくりに取り組む

リゾート観光業の大手「軽井沢プリンスホテル」が自伐型林業の森づくりを展開しながら、都市部からの観光客に学びの場とレクリエーションの機会を設けるようになった(長野県軽井沢町)。

2 モデル事業実施地域の概要と課題

2.1 事業実施地域の概要・課題

< 5つの地域 | 共通する課題と概要 >

豊かな森林資源を抱え、都心のキャンプやアウトドア客はいるが、持続可能な交流や人の定着に至っていない地域である。また、昨今の台風や豪雨で被災した地域であり、森林資源が失われつつあり、住民は危機感を肌で感じている。地域に仕事が少ないことによる若者の流失や、高齢化・少子化により、森林資源活用の担い手が不足している。

こういった課題解決のため、市町村をあげて関係人口の拡大と、副業兼業による仕事づくりを可能にする「自伐型林業」に注目し始めた地域である。

(1) 宮城県丸森町

- ・福島と県の県境に位置する南端の、人口約1万3千人の町。
- ・町内の総面積の70.2%が林野であり19,190haの山林がある。
- ・かつては優良な木材、原木しいたけ、木炭の産地だった。
- ・2019年10月12日の台風19号により、10人が死亡、行方不明1を出し、自治体単位では全国でも最多の犠牲者を出した。阿武隈川の支流の堤防が決壊したほか、激しい雨で削り取られた土砂が家に流れ込む土砂崩れ、川底の石や岩が流れる土石流の被害が多くみられた。

(2) 熊本県水上村中心とする球磨川流域（水上村のほか、球磨村、八代市、人吉市）

- ・日本三大急流・球磨川の源流に位置する。ヤマメがいる清流があり、カヌー体験もできる。
- ・村内にある市房山には樹齢800年以上の原生林が残り、天然記念物「ゴイシツバメシジミ」という蝶が生息する。
- ・町内の総面積の91.2%が森林（17,425ha）。
- ・人口減少：1955年の7,155人をピークに2,369人へ（2015年（H27年））。
- ・2020年の熊本豪雨災害では、水上村を含む球磨川流域に豪雨による大規模な土砂崩れ、土石流の被害が発生した。

(3) 千葉県大多喜町（および鴨川市）

- ・大多喜町の総面積の68.3%（8,874）、鴨川市の総面積の62.2%（11,966ha）が山林である。
- ・人口減少：大多喜町は1947年の20,431人をピークに10,671人（2010年）に鴨川市は1950年の48,571人から33,932人（2015年/平成27年10月）となっている。
- ・都市圏から好アクセスという地理的条件があり、国内でもいち早く都市住民による棚田活用といった農山村フィールドの活用が根付いている。鴨川市には「日本の棚田百選」に認定された棚田があり、「棚田のオーナー制度」が実施されている。
- ・株式会社「良品計画」は大多喜町の廃校を活用したコワーキングスペースの運営や6次産業化の研修を行っている。また、鴨川市では、「里のMUJI みんなみの里」を運営する総合交流ターミナルを設置し、農産物や地場産品の販売、田植え・稲刈りなどの体験イベントも開催し、都市と農村の交流拠点がある。
- ・すでに、「良品計画」や「自伐型林業推進協会」、大多喜町の地域おこし協力隊（総務省事業）メンバーら

による「房総自伐型林業推進協議会」が立ち上がり、フォーラム開催や林業研修を実施している。

・2019年の台風15号では暴風による風倒木被害が県内全域に広がった。大量の倒木による長期停電が起これ、防災意識の高まりがある。

(4) 群馬県前橋市（事業期間中に長野県軽井沢市へと波及）

- ・市内の総面積の24%が（7,466ha）山林。
- ・雄大な自然を抱く赤城山のふもとに位置する。都心へのアクセスもよく、生活に便利な市街地があり、周辺には緑豊かな田園地帯や山間のアウトドアスポットが広がる。
- ・山林を管理する担い手の育成を、自伐型林業に取り組む合同会社「IRORI 場」（前橋市）が林業研修を開催し、森林管理の担い手を育成している。また、主要メンバーが「移住コンシェルジュ」を引き受け、都心部在住者の受け皿役として稼働し始めている。
- ・市内各地で森林が集団的に枯れる「ナラ枯れ」が拡大しており、本来不要であるはずの薬剤や殺虫剤を対策として利用している。薪や炭などエネルギー減としても貴重な資源であるはずの広葉樹が無用の長物となりつつある。
- ・赤城山の南西地にある鍋割山（前橋市）周辺では山林を切り崩した大規模ソーラーパネルの設置計画が進み、そこからの土砂崩壊の懸念の声が上がっている。それに代わる環境保全型の山林管理が求められている。

(5) 大分県日田市

- ・福岡県と熊本県との県境に位置する、人口約6万7千人の市。
- ・町内の総面積の82.6%が林野であり55,072haの山林がある。
- ・2016年の「九州北部豪雨」（死者3名、負傷者4名、住家被害1293棟）の被害のあとに発足した自伐型林業グループ「下毛の里自伐型林業研究会」（同県中津市）が日田市内の大山林所有者とともに活動するようになり自伐型林業研修を行っている。
- ・2020年の「令和2年7月豪雨災害」では、崩壊が多数あつたものの同グループの自伐展開の山林は被害がなく、この地域での適切な森林管理の施策が証明されつつあり、環境保全の側面から、日田市でも展開を拡大する機運が高まっている。

2.2 関係人口創出・拡大に関わる取組みのビジョン・テーマ設定

(1) 取組みにおけるビジョン

本事業は、災害に直面した中山間地域を舞台に、森林資源を活かし、複数の仕事をかけ合わせた「半林半X」の生業を作り出し、都市住民からのUIターン者等が地方に向かう機会を創出する事業である。

具体的には、2014年（平成26年）に「まち・ひと・しごと創生本部」の指針にも記載された「自伐（じばつ）型林業」を軸に、小規模農業等を組み合わせた生業を構築し、各地で就業者を5人以上創出させ、その支援体制を構築（地域推進組織を設立）する。

経済的に持続可能な暮らしの確立を軸に据え、都会からのUIターン者が研修やワークショップでの交流によって、「半林半X」の新たなライフスタイルの多様性をさらに引き出す。そして、災害に強い森林管理手法の地域モデルを全国に示す。

(2) 背景

近年の豪雨・防風被害を受け、放置された森林由来の土砂崩壊が発生するとともに、ナラ枯れカシ枯れといった森林資源の価値の低下が懸念されている。

一方で、その森林資源について、都市部からは多くのメリットや多面的機能を利用した活動（森林に癒し効果を求める「森林セラピー」や保育事業「森のようちえん」、キャンプ、グランピング等）が近年人気となっている。

しかし、都心部からの動きは流動的で、一つの地域にたびたび訪れてもらう、もしくは定着してもらうには、地域に居場所や仕事という役割があることが欠かせない。

今回事業を行う地域は、上記のような背景を持ちながらも、豊富な森林資源に気づき、小規模分散管理する「自伐型林業」の研修をスタートさせ、都市部との交流を始めつつある地域でもある。

この事業展開により、東京への一極集中を是正し、魅力ある地方への移住希望者を作り、移住者を受け入れ、その人たちの生業を地域で作り出すことができるような「地域推進組織」をつくる。そして、地域で面的広がりを持たせ、自治体が支援に乗り出すモデル事業へと発展させる。

地域推進組織の果たす役割は、「自伐型林業」のスタートアップを支えることから始め、林業の知識や安全を確保するための勉強会、林業技術を習得するための技術研修、持続可能な経営をするための経営講習などを開催する。その上で、関係人口を創出するためのイベント開催、広報展開、自治体・企業との連携を進める役割を持つ。実際の活動は以下団体が主体となる。

①宮城県丸森町「あぶくまの里山を守る会」、②熊本県球磨郡水上村「水上焼畑の会」、③千葉県鴨川市「房総自伐型林業推進協議会」、④群馬県前橋市では「合同会社 IRORI 場」、⑤大分県日田市「下毛の里自伐型林業研究会」。

3 モデル事業の取組内容

3.1 取組みの全体像・スキーム

(1) 取組みの全体像

事業実施する5つの活動地域は、災害に対する意識が高まっているエリアである。当団体はその5地域のグループと協働し、長伐期多間伐施業（※）による持続的な森林づくりと、多様な森の活動を融合させた魅力創出を行う。農林漁業に関心のある移住希望者に対して、新たな一次産業の仕事の場を提供しながら、森林の価値の最大化と、林業・森づくりと地域産業を兼業する「半林半X」の生業創出を目指す。

※長伐期多間伐施業…植林して約50年で全部伐採する「短伐期皆伐施業」に対して、森の成長量を超えない間伐生産（2割以下）を繰り返し、地域に張り付いた森林経営する定住型の施業。

持続的な森林経営と地域産業の兼業化による生業（なりわい）の創出

・ 事業概要

災害に対する意識が高まっているエリアにおいて、主に5地域のグループと協働し、長伐期多間伐施業（※）による持続的な森林づくりと、多様な森の活動を融合させた魅力創出を行う。

手段は「自伐型林業」。農林漁業に関心のある移住希望者に対して、自伐型林業のステップアップ（右図参照）を通じて、失われつつある中山間地の一次産業を組み合わせた生業を創出し、森林の価値の最大化と、林業・森づくりと地域産業を兼業する「半林半X」のライフスタイルを作る。

・ 事業開始から現在までの進捗状況（21年7月時点）

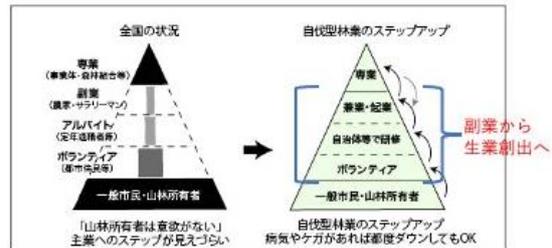
1) 宮城県丸森町では災害勉強会（ワークショップ）を開催。7月22日にフォーラム開催。その後、研修会を開催予定。2) 熊本県球磨川でも同様に開催。3) 千葉県（大多喜町・鴨川市）、4) 群馬県（前橋市）、5) 大分県（日田市）ではグループが自主事業と兼ねて開催準備。そこを起点に、周辺自治体へと展開が広がっている。（右地図参照）

・ 現在抱えている課題

災害が頻発し、ともに活動したいという地域からの要望が多数あり、地域を絞るのが困難。対象地域を拡大し、横展開を加速させたい。

※長伐期多間伐施業…

植林して約50年で全部伐採する「短伐期皆伐施業」に対して、森の成長量を超えない間伐生産（2割以下）を繰り返し、地域に張り付いた森林経営する定住型の施業。



- ①宮城県 →丸森町から周辺地域へ
- ②熊本県 →球磨川流域の多数市町村へ拡大
- ③千葉県 →大多喜町から県へ
- ④群馬県 →前橋市GPが稼働
- ⑤大分県 →日田市の大山林所有者が協業し研修スタート
さらに…
- ⑥徳島県（台風被害）
- ⑦静岡県（伊豆山土石流）
等で機運高まる。

(2) スキーム

・関係人口の増加のためには、地域林業の担い手となる中核人材の育成が必要となる。5地域すべてにおいて、自伐型林業を地域内で周知させるためのフォーラムを企画し、関心のある人向けの研修会を開催する。さらに実践意欲のある人を中心に、地域の林業支援組織である「地域推進組織」を作るワークショップを開催する。（環境型林業を定着させる地域推進組織の創出）

・災害現場の視察会を行い、原因と対策の学習交流会を開催し、災害を起こさず経済的に成り立つ林業手法の学習会と研修会を継続開催する。（災害に強い地域づくりの普及）

・中核人材が中山間地で十分に暮らせる「半林半X」の生業を創出するために、地域に隠れた仕事の基礎調査（季節労働の種類や事業者の潜在的雇用の発見と整理）を行い、各地の通年の生業モデルを整理する。（個別の「半林半X」の生業創出）

(3) 関係者（産学官民等）の役割

当協会が事業全体の進行を担当し、フォーラムや研修の企画を行うとともに、地域生業の調査などの業務を担う。地域推進組織が現地でのイベントの開催のコーディネートを担い、UIターン者の受け入れや相談を行う。

地域推進組織の地域が面的展開につながるよう、すでに自伐型林業を展開している自治体から情報を提供していただき、自治体展開のパターンを整理し、モデル化を図る。

その情報をもとに、地域推進組織が活動する周辺自治体にはイベントの情報を常に共有し、2年目以降の自伐型林業支援策づくりを目指す。

(4) 具体的な内容と効果

① 環境型林業を定着させる「地域推進組織」の創出

1) 環境と林業に関するフォーラムの開催と現地視察会

(関心を持つ人を掘り起こす。災害の原因を知り、環境保全の重要性を理解する。→これまで自伐展開地において通常 50~100 人が参加)

2) 関心のある人への研修会(一通りの林業体験)の開催

(8 日程度の研修によって、自伐型林業のイメージを実感する)

3) 地域推進組織づくりのためのワークショップ開催

(地域における担い手の役割について、参加メンバーが共通認識を持つ)

(5) 個別の「半林半 X」の生業創出

・地域の生業調査(季節労働、業種、適正年齢等)

中山間地域には農林水産業や観光業、公共事業業種が多種あり、それぞれ季節ごとに繁忙期のピークが存在し、そのシーズンに人材不足が叫ばれる。農閑期に林業を実施するように、最適な組み合わせができるかを業種ごとにヒアリング調査する。

・生業調査をまとめたレポート作成

各地の通年仕事のスケジュールをまとめ、最適な「半林半 X」をイメージさせる。

3.2 期待される効果・KPI

(1) KPI、資金計画、費用負担のあり方

各団体とも研修や勉強会で地域展開をしようとする団体であるため、事務局の自己負担もある形での費用を負担する。

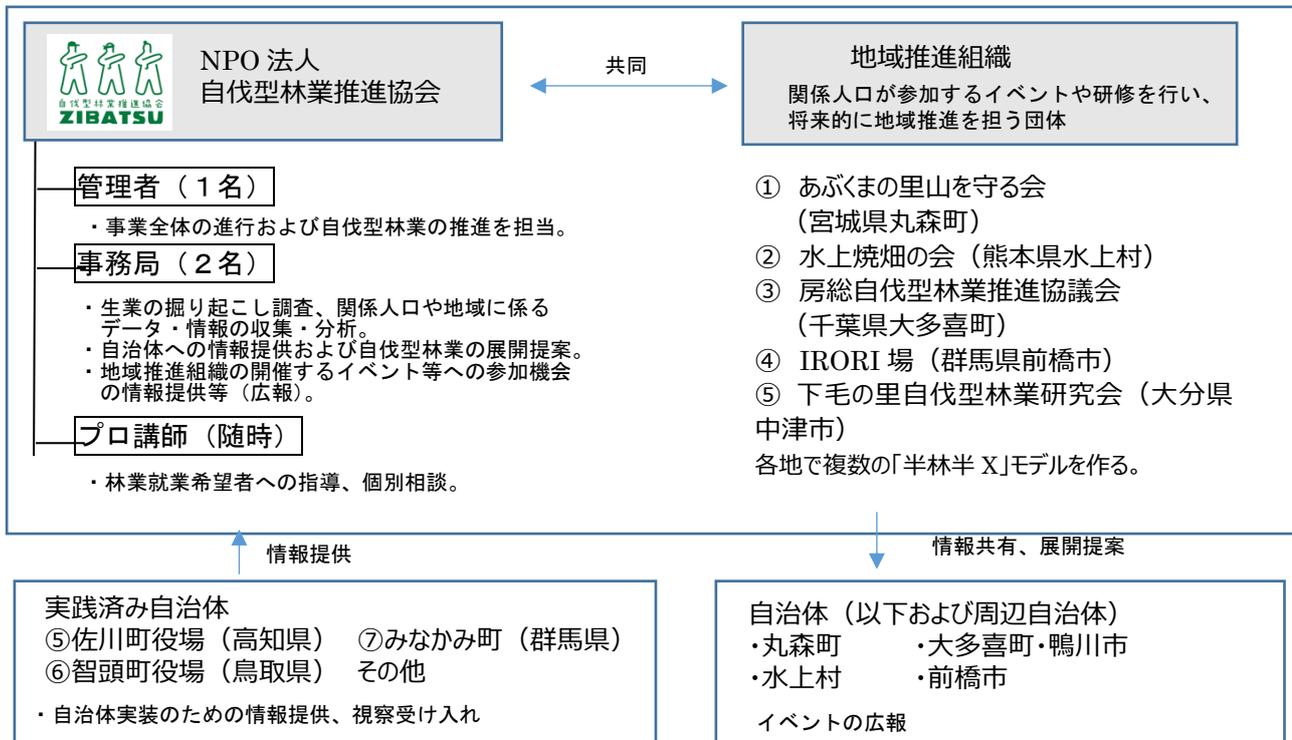
①~④の地域各地が同じスキームで実施し、1 地域あたりのフォーラムおよび災害現場参加者 100 人(合計 400 人)、研修参加者 20 人(フォーラム・災害地視察者の 2 割/合計 80 人)、各地 4~5 人が自伐型林業者(半林半 X 実践者)のメンバーとして「地域推進組織」を組織する。なお、日田市については、フォーラムおよび災害地域視察とワークショップを行う。

関係人口を増やし、「半林半 X」のモデルをつくるためには、すでにその模範となるプロ講師を紹介し、その言葉を地域に届けて現地と交流させるようなフォーラムの設計が大事である。さらにそのプロ講師が研修で教え、着実な技術継承を行う必要があるため、講師にかかる旅費や謝金が事業経費の多くを占める。

各地が約 130 万円程度の資金(フォーラム・現地案内 37 万円、研修 70 万円、ワークショップ 8 万円、その他)で活動し、当会がそれを企画運営サポートするとともに、モデル化するための後方支援を行う。

4 事業実施に係る運営体制

4.1 事業実施体制



4.2 事業実施団体及び関係機関の役割

NO	名称	役割
1	あぶくまの里山を守る会	宮城県丸森町にて、2019年の台風19号による土砂災害地を案内するとともに、それに対する環境共生型の林業を学べるようなイベントや研修を実施する。特に阿武隈川沿いの町からの関係人口増加を目指す。
2	水上焼畑の会	熊本県水上村にて、2020年の7月豪雨の森林崩壊現場をフィールドに、学習会や研修を開催する。球磨川流域で被災した集落の住民（出身者含む）や、ボランティア活動に訪れた関係人口が参加するイベントを企画する。
3	房総自伐型林業推進協議会	千葉県大多喜町および鴨川市において、関係人口が参加するイベントや研修を実施する。特に首都圏からの移住希望者向けに、廃校や棚田を活用し、狩猟や6次産業化を組み合わせた生業作りを学べる場を作る。
4	IRORI 場	群馬県前橋市にて、赤城山周辺の関係人口が参加するイベントや研修を実施する。登山やアウトドア観光客の多い地域であり、こんにゃくの特産地であり、農業や観光と林業を組み合わせモデルを示す。

5	下毛の里自伐型林業研究会	大分県中津市および隣接する日田市周辺で、台風豪雨の影響と自伐型林業の有効性を共有する現場視察会やワークショップを開催する。日本でも指折りの美林地帯であり、しいたけ等の特産林産物の大生産地でもあるため、一次産業を掛け合わせた山の守り方を示せる生業モデルを作る。
6	佐川町役場	自治体実装のための情報提供を行い、必要であれば視察受け入れを協力する。特に地域おこし協力隊の導入によるパフォーマンスの意見を期待する。
7	智頭町役場	自治体実装のための情報提供をにない、視察を受け入れる。特に針葉樹地域や昔ながらの林業地の対応を担当する（日本三大林業地であるため）。
8	みなかみ町役場	自治体実装のための情報提供、視察を受け入れる。特に国連のSDGs やユネスコエコパーク等の、国際的な活動との関わりを担当する。
9	自伐型林業普及推進議員連盟	事業の広報・周知、各地議員への情報共有、地方創生事業の情報提供。（代表：中谷元衆院議員）

5 事業実施内容

5.1 実施スケジュール

実施事項	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月			1月			2月			前回計画からの修正・変更点、理由、今後の対応方針
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下				
1.フォーラムと災害現地視察会にむけての打ち合わせ（5地域）				内容、日程等、関係者で打ち合わせ（5地域）									フォーラム＆視察会：丸森町7/23						10/17球磨川（水上町ほか）基本構入志フォーラム			5地域開催フォーラム			12/1球磨川（水上町ほか）委員会を含めた現地視察会・意見交換会			12/18日田市 視察会			1/23球磨川流域（五木村）現地視察			コロナのため、千葉朝川フォーラムが中止になりました。1/22は球磨川流域の美里町でフォーラムと研修を開催予定でしたが、コロナのため延期になりました。そのため、22日は今後の展開について打ち合わせを行い、翌日1/23は、少人数で災害現場の現地視察会を行いました。
2.フォーラム開催をHP・SNS上で告知・募集													災害現地視察会・フォーラム告知																					
3.研修会（一週りの林業体験）の開催				8日×2セット（安全講習、伐倒、搬出、作業道、整齊補設）×4地域にて						企画・県迎自治体への案内 軽井沢 7/20,21			告知・募集						丸森町 9/18~20	丸森町 2 10/9,10				丸森町 3 11/20,21	12/12丸森町4ステップアップ議									
4.災害ワークショップ（勉強会）の開催（地域推進組織の確立を目指す）				企画・周辺自治体への案内・募集						5/26球磨川（水上町ほか）			丸森町7/21						9/17球磨川ほか（芦北・水俣地区）			水上村ほか球磨川（横町） 軽井沢 10/11,12			11/14丸森町			日田市前津江村にて12/18						
5.地域の生業調査（季節、業種、適正年齢等）																																		レポートの報告
6.事業報告書の整理・まとめ																																		報告書の整理・まとめ
7.																																		
8.																																		
9.																																		
#																																		

3.その他の報告事項（自由記載：今月の取組の工夫、成果、得られた気づき、今後に向けた課題など） ※取組に関連する資料（開催チラシやプログラム等）や写真、ウェブサイト等ありましたら、是非、本シートの提出時に事務局までメール添付にてお知らせください

1/22の球磨川流域の美里町でのフォーラムがコロナのため中止となったので、美里町は現地での打ち合わせに変更しました。美里町は、球磨川（10/17の人吉市）のフォーラムに参加した人の中から自伐型林業を展開したいという人があられ、町が具体的な展開を開始し始めました。フォーラムと研修は延期となりましたが、4月以降にやりたいと思います。

五木村は、五木村山村活性化協議会メンバーが球磨川（10/17の人吉市）のフォーラムを見て「展開を検討したい」となり、本村山村活性化協議会が意見交換会をしたとの要望で訪問。

参加メンバーは五木村村長をはじめ、農林課長、農林課林業係長、五木村林研グループ会長と協議会メンバーでの会合で、その後、五木村の樹伐現場等の視察を実施。災害を起こさず木材利用を拡大させ、地元内外の若者の就業を拡大させることができると、自伐型林業を評価していました。

5.2 事業の広報・アプローチ

フォーラムおよび研修会の広報活動（参加者確保）については、チラシを作成し、自伐型林業に関心のあ

人達がアクセスする「自伐型林業推進協会」のHP および SNS にて直接情報を届けるよう発信した。また、自伐型林業を知らない人たちで、環境保全や田舎のライフスタイルに関心のある人たちに届くよう、テレビや新聞、業界団体、著名ブロガー等に情報を提供し、紙面や番組にして広く届ける取り組みを行った（間接的アプローチ）。

(1) オウンドメディアによる広報（直接的アプローチ）

1) オンライン番組の企画 (Youtube)

日本唯一の林業専門番組「ZIBATSU (じばつ) ニュース」(チャンネル登録者数：5,700人 (2022年2月6日時点)) にて、関係人口関連の番組を連続的に企画し配信した。(活動内容③に詳細記載)

2) HP および SNS による発信 (Facebook)

自伐型林業推進協会のHP にてチラシとイベント情報をFacebook (フォロワー数：3,277人 (2022年2月6日時点)) にてイベントを発信し、参加受付やアンケート回収を行った。



作成したチラシ (抜粋)



「ZIBATSU チャンネル」でのリリース画面

(2) テレビ・新聞等の既存メディアによる広報（間接的アプローチ）

① テレビメディア

- ・NHKの「クローズアップ現代+」のディレクターと当事業の動きを共有し、フォーラムや研修の情報を随時案内。災害と自伐型林業をテーマに特集を制作し放映された(2021年9月15日)。これをきっかけに、以降開かれるイベントへの参加者や問い合わせが増加した。

- ・テレビ朝日系の「テレメンタリー2021」のディレクターに東日本の災害と環境保全型林業について情報提供を行い、丸森町でのフォーラムや現地視察の様子が収録された「土砂災害と森林伐採—民家に迫る危険」(<https://youtu.be/sU7rXrXxb0M>) をテーマに放映された(2021年10月22日)。Youtubeでも公開され、視聴者数は10,242回(2022年2月7日現在)を数えた。

② 新聞メディア

西日本新聞（画像参照 2021年10月18日付け）、人吉新聞（10月16日に告知、18日にレポート）にて掲載（人吉市のフォーラム等）。人吉新聞の告知については、紙面を見た地域住民約5人から問い合わせがあり、約10人が来場した。

③ 業界団体

東日本大震災からの復興を専門家という立場で継続的な支援をする「宮城県災害復興支援士業連絡会」がHPで掲載。（丸森町でのフォーラム）



④ 著名ブロガーによる発信と登壇

日本最大のニュースサイト「Yahoo!ニュース」において「オーサーアワード2019」(※)を受賞しているジャーナリストの橋本淳司氏を当事業の丸森町（宮城県）、球磨川流域（熊本県）を案内して災害と関係人口の紹介を行い、関連する複数の記事が掲載された。

また、丸森町と球磨川のフォーラムには登壇していただき、地元住民との知識的交流が図られ、現地視察にもその知見を聞きに多くの住民が参加した。

<掲載記事>

●土砂災害で忘れがちな第3の要因～林業施業が起因となった崩壊が98%～（2021年6月29日）

<https://news.yahoo.co.jp/byline/hashimotojunji/20210629-00245308/>

●「令和2年7月豪雨」災害を大きくした「雨×土地×土地開発」の掛け算（2021年7月3日）

https://news.yahoo.co.jp/byline/hashimotojunji/20210703-00246154

●雨が止んでも河川氾濫や土砂災害が発生するメカニズム（2021年8月15日）

https://news.yahoo.co.jp/byline/hashimotojunji/20210815-00253297

※ヤフー株式会社が「発見と言論が社会の課題を解決する」を年間で最も体現した書き手に与える賞で、2019年は660の著者から一人が選ばれた。

5.3 活動内容① フォーラム・災害視察会開催

林業に関心を持つ人を掘り起こすためのフォーラムを開催した。災害の原因を知り、環境保全の重要性を理解する場として、地元住民と地元外の人たちをつなげるような体制で企画した。また、地元に住む人た

ちでも知らないような森林の状況を見てもらうための視察会を開催した。

(1) フォーラム

- ① フォーラム 1(宮城県丸森町 2021 年 7 月 21 日)
- ② フォーラム 2(熊本県人吉市 2021 年 10 月 17 日)
- ③ フォーラム 3 (徳島県美浪町 2022 年 2 月 26 日)

■フォーラム 1

名称	東日本豪雨災害調査報告 丸森の山を歩いてわかったこと～災害に強い森づくりとは～
日時	2021 年 7 月 21 日 14:00～
会場	丸森まちづくりセンター大ホール
登壇者	菅野由香里 (丸森町在住/Connect Feelings)、橋本淳司 (水ジャーナリスト)、中嶋健造 (NPO 法人自伐型林業推進協会代表理事)、
参加人数	現地参加 50 名、オンライン参加 60 名



【プログラム】

開始時間 (オンライン上のタイムコード)	プログラム	メイン
01:22	開会	齋藤百合子
03:09	開会の挨拶	大槻博
08:35	被災地から見えた課題	菅野由香理
33:20	流域での暮らしを考える	橋本淳司
1:03:30	小さな林業の大きな可能性	中嶋健造
2:06:10	パネルディスカッション	登壇 3 者+渡辺啓 (波伝の森山学校)、肥田浩、萬代好伸 (オープンジャパン)



コロナにより大した宣伝はできなかったが、それにもかかわらず多くの地元の人々が参加してくれた。「地域住民は山に関心がない」という固定概念を大きく覆した。自伐型林業の可能性（災害を防ぐ林業であり、自伐をなりわいにする地域振興をする移住者も増える）を詳しく説明したところ、住民も大いに関心を持ってくれた。会場にいた若者からは、どうやって自伐型林業を始め、スキルアップし仕事にできるのかという質問があり、実際に取り組むことを想定した人もいて、意欲がみえた。

さらに、丸森町役場が関心を示し、丸森町内（人口1万3972人/2021年）での自伐型林業の展開を視野に入れた協議の場を持つこととなった（以下、協議会の模様を参照）。

<外部メディアでの報告>

●丸森観光案内HP <http://marumori.jp/blog/2021072339470/>

■フォーラム2

名称	フォーラム「球磨川流域の土砂災害で見えてきたこと」in 熊本県人吉市
日時	2021年10月17日 13:30～
会場	人吉・新町町内会館
登壇者	橋本淳司さん（水ジャーナリスト）、つる詳子さん（自然観察指導員熊本県連絡会会長）、中嶋健造さん（自伐型林業推進協会・代表理事）、岐部明廣さん（外山胃腸病院理事長）、溝口隼平さん（Reborn・代表）、中尾雄基さん（株式会社WOOD LIFE代表）
参加人数	会場：約60名（定員50名のところ） オンライン：約160名

【プログラム】

開始時間	プログラム	メイン
03:03	あいさつ	笹本由紀子（人吉豪雨被災者の会）
09:05	被災地から見た課題	橋本淳司（水ジャーナリスト）
39:00	球磨川豪雨災害から考える森の再生～流域の	つる詳子（自然観察指導員熊本県連絡会）

	現状と災害の関係～	会長)
01:16:34	土砂災害の原因は『豪雨』だけに非ず	中嶋健造 (NPO 法人自伐型林業推進協会 代表理事)
02:23:43	パネルディスカッション	登壇3者+岐部明廣 (外山胃腸病院理事 長)、溝口隼平さん (Reborn・代表)、中 尾雄基 (株式会社 WOODLIFE 代表)

球磨川の水害で被災した地元の方、これから自伐型林業をやってみたいという若手の方を中心に九州各地からの参加者があり、熱気が溢れる会となった。

開催にあたって参加者の熱心な質疑はもとより、主催者たちがスタッフ向けに食事を用意したり（写真参照）、泊まり込みで準備を重ねたりして、今までつながりのなかった団体のつながりが生まれた。

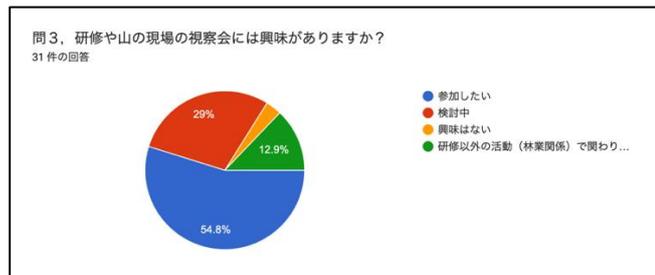
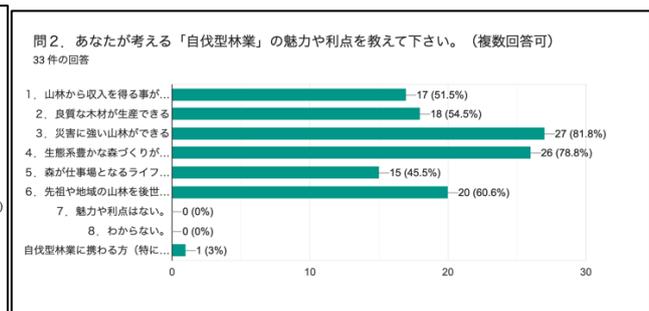
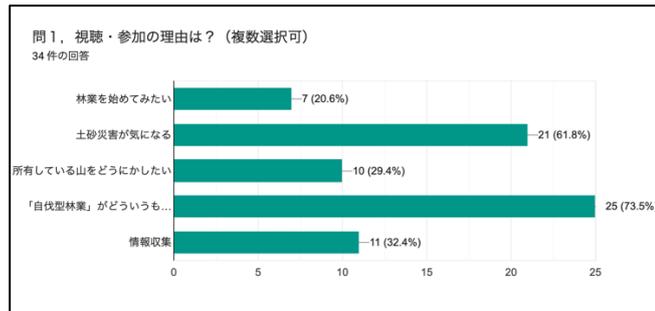
特に、協賛団体（小さな林業球磨人吉・球磨川庵・水上焼畑の会・美里町林研グループ・自伐型林業（ファミリー林業）で山を創る会）のうち、林研グループといふかねてから地域林業を支えている組織が賛同してくれたことで、その後の役場への提案（後日、研修会の事業を予算化）につながり、球磨川流域の研修の受け皿が出来上がるきっかけとなった。



●特記事項（アンケート結果）

・アンケートの結果（回答数：34件）、来場者の参加理由は、「自伐型林業」がどういうものか知りたい（73.5%）がトップで、「土砂災害が気になる」（61.8%）であり、「自伐型林業」の魅力や利点についても、「災害に強い山林ができる」（81.8%）「生態系豊かな森づくりができる」（78.8%）に期待を寄せており、フォーラム参加者は土砂災害を防ぎ生態系豊かな環境をつくりたいと思う人たちが関わりを求めて参加した傾向が見られた。

・参加者の半数は、現場視察会に興味を示し、フォーラム語の連続的に集まる機会をつくる期待感も示された。



■フォーラム3

名称	フォーラム「自伐型林業 in 美波町」
日時	2021年2月26日 13:30～
会場	美波町日和佐公民館 大会議室
登壇者	吉田 基晴（株式会社右下木の会社代表取締役社長）、岡田育大（株式会社フォレストバンク代表取締役社長）、中嶋健造（NPO 法人 自伐型林業推進協会代表理事）、鎌田磨人（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）
参加人数	約40名

※自主財源で開催

コロナ感染拡大が広がっているため、大々的な広報活動ができなかったものの、チラシと Youtube と HP での案内により 50 人収容の会場の 8 割が埋まる盛況ぶりであった。

全参加者（名簿記載 37 人）のうち 3 分の 2 の 25 人が県内からの参加（町内 8 人含む）であったが、関西圏から 8 人、関東や九州から 4 人が集い、他で開催した丸森、球磨川地域と同様に県外者の来訪が目立った。徳島県内での自伐型林業のフォーラム開催はこれまでほとんどなかったため、注目を集めた形になっ



た。



(2) 現地視察会

- ① 現地視察会 1(球磨川流域 2021 年 12 月 1 日)
- ② 現地視察会 2(大分県日田市 2021 年 12 月 18 日)
- ③ 現地視察会 3(球磨川流域 2022 年 1 月 23 日)

■現地視察会 1

日時	2021 年 12 月 1 日
会場	球磨川流域、熊本県議会
参加者	つる詳子、加來健良、鎌田聡(熊本県議会議員)、磯田毅(熊本県議会議員)ほか 3 人、中嶋健造(NPO 法人自伐型林業推進協会代表理事)、

10 月のフォーラムから関心が高まった球磨川流域において、登壇者のつる詳子氏の紹介で熊本県 議会議員や地元住民へ座学と現地視察会を開催した。

(参加者の感想/つる詳子)

「10 月に人吉で開かれた自伐シンポジウムで知り合いになった日本自伐推進協 議会の中嶋健造さんをお願いして、今日の学習会となった。

積極的にこの林業の推進に力を入れている自治体では、地域外からの移入も含め若い林業就労者が増えていくとのこと。災害で人口減が心配される球磨川流域にとっては、希望も出てきそうです。それには、最初の数年間、道づくりのための補助だけは不可欠のようです。一部の県議さんだけでなく、今回の災害に心を痛めた他の議員さんや担当部局の方にも知ってほしいと思います。」



(県議会での座学と美里町の道造り現場)

■現地視察会 2

日時	2021年12月18日
会場	大分県日田市
参加者	上津江地区の住民 11 人、中嶋健造(NPO 法人自伐型林業推進協会代表理事)

日田市は 2017 年の九州北部豪雨中心に毎年のように豪雨災害を受けている地域。その地域で、既に、その対策として自伐型林業展開している前津江地区メンバーと、これからの活動にむけて準備段階にある上津江地区のメンバーとの交流会。メンバーの広げ方、団体立ち上げ、運営ノウハウなどを伝える目的で開催した。

(ア) 大規模林業地の土砂流出現場視察会:9 時~12 時(上津江地区)

大規模な作業道敷設現場と間伐現場の視察会を実施(参加者:11 人)

自伐型林業とは真逆の大規模な施行は、環境に負荷を与えるということを実感する目的。

(イ) 座学交流会

テーマ:土砂災害拡大の原因は「豪雨」だけに非ず~林業起因の土砂災害の真実とその対策としての自伐型林業~

(ウ) 前津江地区の自伐型林業実践地域の視察会・交流会(上津江地区の方々)

前津江地区の山林所有が中心になって行っている、豪雨により壊れた作業道を、自伐型林業の手法で修復するという取り組みを、上津江地区のメンバーへも伝播するために実施。

(感想)

日田市の上津江村地区は、日田市合併後急速に人口減となり過疎化が進展している。森林ポテンシャルは高く、現状ではこの森林を活かすことができていないため、今後新規就業創出につなげることができるかどうかを話した。参加の方々からは「もう無理だ」とか「高齢化し過ぎている」とかマイナス意見がある一方で、もう一度やり直そうという意見もあった。

また、生産量重視の大規模林業が進展し、皆伐や荒い間伐が増えており、持続的森林経営ができない森林を拡大させている。またその林業が災害を引き起こしている状況で、まさに悪循環進展中だったが、その

大規模林業展開は始めたリーダーだった方が、この問題点に気づき転換を図ろうとされていた。今回はその展開に協力する形での訪問になった。

交流会終了後に日田の街で自伐展開を始めているグループと交流会。10人ぐらいの若手グループ。この1・2年の間に10人ほどに膨れ上って(山林所有者と素人からの新規参入者と事業者からの転換者が混ざり合っており)、大きな可能性を感じ、迫力があつた。今年度は、壊れない作業道を約1km敷設しており、その存在をアピールしている。

■現地視察会 3

日時	2022年1月23日
会場	球磨川流域
参加者	五木村職員および協議会メンバー15人、中嶋健造

五木村は、五木村山村活性化協議会メンバーが球磨川(10/17の人吉市)のフォーラムを見て「展開を検討したい」となり、木村山村活性化協議会が意見交換会をしたいとの要望で訪問した。参加メンバーは五木村村長をはじめ、農林課長、農林課林業係長、五木村林研グループ会長と協議会メンバーでの会合で、その後、五木村の皆伐崩壊地等の視察を実施。災害を起こさずに木材利用を拡大させ、地元内外の若者の就業を拡大させることができると、自伐型林業を評価していた。



5.4 活動内容② HP や SNS 等での告知・募集(および動画チャンネルでの番組企画)

(1) 目的と内容

いかにして活動地域の企画に地域内外から参加してもらい、将来的に関係人口となりうる人たちの目に触れるようにするかが事業のポイントであった。フォーラムや現地視察会といった現場の感覚を不特定多数の関係人口層にも届けられるよう、またコロナ感染が落ち着かない状況で会場参集が限られてしまうことを予測して、フォーラム関連は当初よりオンラインでの配信を企画した。

また、識者をゲストに関係人口の話題を提供してもらうとともに、実際に自伐型林業を実践して関係人口を創出しているゲストにも登場してもらうような番組を企画した。(視聴者数はすべて2022年2月28日時点のもの)

(2) 実施状況・結果

オンライン番組：合計 5 番組

視聴回数：合計 6,350 回

■ オンライン番組 1

名称	現役記者に訊く！「関係人口」と自伐型林業の挑戦
日時	2021年4月22日
会場	オンライン
参加者	上垣喜寛（自伐型林業推進協会事務局長）・西岡千史（事務局）、
視聴者数	781人
概要	内閣府のモデル事業に、自伐協の事業が採択されました。自伐型林業が「関係人口」を増やすことで日本の森林を救うことができるかもしれない！ということ、長年、自伐協に協力いただいている西岡千史さんと話しました。
アドレス	https://youtu.be/YvkKeDiM1Zo



■ オンライン番組 2（フォーラム中継）

名称	東日本豪雨災害調査報告 丸森の山を歩いてわかったこと～災害に強い森づくりとは～
日時	2021年7月21日
会場	オンライン
参加者	菅野由香里（丸森町在住/Connect Feelings）、橋本淳司（水ジャーナリスト）、中嶋健造（NPO 法人自伐型林業推進協会代表理事）、
視聴者数	1988人
概要	豪雨による災害が激甚化する中、丸森町の防災減災を「森づくり」の観点から探ることで、将来の災害を起こさないためにできること、地域にあった森の活用と地域振興について、全国の事例なども交えながら話し合った。
アドレス	https://youtu.be/-1F4Xvxj-V4

■ オンライン番組 3（フォーラム中継）

名称	フォーラム「球磨川流域の土砂災害で見えてきたこと」 in 熊本県人吉市
----	-------------------------------------

日時	2021年10月17日
会場	オンライン
参加者	橋本淳司さん（水ジャーナリスト）、つる詳子さん（自然観察指導員熊本県連絡会会長）、中嶋健造さん（自伐型林業推進協会・代表理事）、岐部明廣さん（外山胃腸病院理事長）、溝口隼平さん（Reborn・代表）、中尾雄基さん（株式会社WOOD LIFE 代表）
視聴者数	1177人
概要	豪雨による災害が激甚化する中、丸森町の防災減災を「森づくり」の観点から探ることで、将来の災害を起こさないためにできること、地域にあった森の活用と地域振興について、全国の事例なども交えながら話し合いました。
アドレス	https://youtu.be/5Plp8_wxrXE



■ オンライン番組 4

名称	被災地からの自伐の担い手育成スタート 宮城県丸森町
日時	2021年9月23日
会場	オンライン
参加者	刈田路代さん（あぶくまの里山を守る会 自伐型林業推進担当）、上垣喜寛
視聴者数	555人
概要	2019年の東日本台風で土砂崩れにあった宮城県丸森町で、自伐型林業の研修が始まりました。老若男女、たくさんの人たちが集った研修は大盛り上がりです。その模様を「あぶくまの里山を守る会」のメンバーに報告してもらいました。大規模林業から小規模分散型の林業へ。「山守（やまもり）を作りたい」という思いを語ってくれました。
アドレス	https://youtu.be/u_nk6ynXSwQ

■ オンライン番組 5

名称	山も、金も、ユンボもなく自伐型林業を立ち上げた中尾さん(35歳)が鹿児島県出水市から登場
日時	2021年10月21日

会場	オンライン
参加者	中尾雄基（株式会社 WOODLIFE 代表）、上垣喜寛（自伐型林業推進協会事務局長）
視聴者数	1849 人
概要	山もない、技術もない、金もない。でも、自伐型林業をやりたい。意欲と熱意で林業を始め、3 人のジバツチームをつくり活動している 35 歳の若手林業家をゲストに迎えました。鹿児島県出水市で株式会社 WOOD LIFE を経営する中尾雄基さん。「どうやって自伐型林業を始めたのですか?」「資金がないけど始められますか?」の質問に、実体験で答えてくれます。初心者必見のトーク回です。
アドレス	https://youtu.be/_SnKBL9GaG0



5.5 研修会の開催

(1) 目的と内容

フォーラムや視察会で関心を持った参加者が災害を起こさず経済的に成り立つ林業手法を学ぶために、研修会を開催した。

(2) 実施状況

研修番号	場所	日時	内容	参加人数
1	長野県軽井沢町	7月20日～21日	壊れない道づくり研修	3人
	〃	10月11～12日	壊れない道づくり研修	20人
2	宮城県丸森町	9月18～20日	チェーンソー取扱技術	13人（のべ39人）
	〃	10月9～10日	伐倒・造材・搬出	13人（のべ26人）
	〃	11月20～21日	壊れない道づくり	18人（のべ35人）
	〃	12月12～21日	ステップアップ研修	15人
3	熊本県水上村・美里町	11月9～11日	林業研修	12人（のべ35人）

	〃	12月14～18日	林業研修	3人
--	---	-----------	------	----

■研修1（長野県軽井沢市）

4月からの動きから、事業予定地の前橋市の檀原(IRORI 場)が軽井沢のグループと接触し、環境保全型の林業を進めたいという気運 が起こった。すると、大手リゾート会社である軽井沢プリンスホテルが閑散期のスキー場の山林を使ってもらって構わない、研修してくれとリクエストがあり、軽井沢での研修会とワークショップを開催した。

■研修2（宮城県丸森町）

丸森町では、2年前の豪雨で大量の土砂が山から阿武隈川支流に流れ込み、広範囲にわたって家が土砂で埋まるなど甚大な被害があり、現在も復旧作業が続いている。その過程で、近年の山の荒廃が被害の拡大を招いたとする住民が中心になり、自伐型林業で里山を整備することで災害に強い地域づくりを行おうという動きが本格化している。

7月に開催したフォーラムに続き、県外、周辺地域、地元住民への意識喚起、スキル向上のため、自伐型林業研修を開催する予定で、今回はその第1回目として、山の整備や災害復旧で必須なチェーンソーの取扱について実習を行った。

（結果）

講習の参加者は13名。他にも見学やサポートという人もいて、総勢約20名の参加。参加者のなかには、教頭や、地域の安全のためにスキルを身に着けたいという警察官（駐在）、復旧作業で丸森町を訪れたことのある消防局員、林業従事者など、地域内外からの参加があった。

女性や若者の参加も多く、防災をキーワードに多くの参加者を獲得できた（NHKの番組「クローズアップ現代+」で自伐型林業が取り上げられたこともあって、どうやったら自伐型林業と始められるか、自伐型林業ができる地域おこし協力隊への問い合わせが増えています）。

チェーンソーの持参率も高く（半分以上）、講習後も実践の場がある参加者が多かったので、継続した関わりがもてる可能性が高い。また、ほとんどの参加者が次回以降のイベントに参加予定であり、丸森町に少しでも関係人口での自伐型林業を着実に進められるよう自伐協としてバックアップを継続していくつもり。当日は、地元放送局（東日本放送）取材があった（後日放送）。

自伐型林業研修

初心者
大歓迎！

～小さい林業で山と地域を災害から守る～

自伐型林業に関心をお持ちの方、新たに林業を始めたい方、山林の管理にお困りの方を対象に、チェーンソーの取扱や作業道開設などの技術を学べる「自伐型林業研修」を開催します。林業未経験者、林業初心者向けの研修となっていますので、どなたもお気軽にご参加ください。



内 容	開催日時	申込締切	場 所
チェーンソー研修 ※全日程参加の方にはチェーンソー取扱技術特別教習修了証を発行します	9月18日(土)18日(日) 20日(月・祝) 9時～17時	9月7日 (月)	久米コミュニティセンター (丸森町字久入上 20-2) および山林
伐倒/造材/搬出研修 伐倒(造材、集材・搬出等の技術を学びます。	10月9日(土) 10日(日) 9時～17時	9月27日 (月)	
作業道研修 山に楽しく、災害に強い作業道開設の技術を学びます	11月20日(土)21日(日) 9時～17時	11月8日 (月)	

注意事項

募集対象：自伐型林業、里山の管理に取り組みたい人、山林所有者でこれからの管理に悩んでいる人など、初心者にも丁寧にお教えします。
研修定員：各研修10名程度（全日程に参加できる方優先とします）
参加費：チェーンソー研修はテキスト代3,000円、他は無料
持ち物：筆記用具、作業しやすい服装、ヘルメット（レンタル可）、手袋、履物、雨天時の雨具、笠巻・飲み物など
申込方法：下記問合せ先にご連絡いただき、裏面の申込書にご記入の上 FAX でお申し込みください
チェーンソー講習の3日目は13時終了予定です

【主催】NPO法人 自伐型林業推進協会 【協力】あぶくまの里山を守る会

◆ 申込・お問合せ ◆

お問合せ：NPO法人 自伐型林業推進協会 tel 03-6869-6372 担当：荒井
 メールによるお申込み yamamomobito@gmail.com（あぶくまの里山を守る会 担当：刈田）
 姓名・住所・電話番号・全年月日をご記入の上、送信してください。
 FAXの方は裏面の申込書をお送りください。





<作業道研修>

開催日:11月20・21日

参加者:16名(定員10名)

(成果)「NPO 法人あぶくまの里山を守る会」の中で、山を守りながら山の生業を作ろう!という山の仲間が増え、チームができつつある。自伐の道で山を拓き(山仕事チーム)、山のレクリエーションを考え(山クリエイトチーム)、山の生業をつくる(山の生業作りチーム)というステップを歩もうと呼びかけられている。

(参加者の感想)

- ・橋本先生は林業だけでなく、生きる指針を与えてくれる。そんな深い講習会で、この講習会に参加できて本当に良かった。
- ・災害がおこったときに、ここで学んだバックホウを使えこなせたら復旧も早くなるし、町外などの広いエリアにそういう仲間がいたら心強い。自分の手助けできる。
- ・丸森町に知り合いができた。
- ・いつもランチタイムで頼む丸森町のお弁当屋のお弁当がおいしい。

■研修 2-2(宮城県丸森町)スキルアップ研修会

日時:12月12日 10:00~16:30

場所:丸森町欠入コミュニティセンター

参加者 15名(うち丸森町外からの参加者 9名)

座学(前回講習の振り返りと安全に関する事例紹介)の後、自伐型林業研修林「親林」にて、3班に分かれて伐倒実習を行った。実習は1伐採する木の選定、伐倒方向の見極め、2伐倒の妨げになる低木やつるなどの除伐・刈払、3講師の指導の下で伐倒、4切り口を見ながら講師からのフィードバックの手順で行い、参加者の中で経験が浅いものを優先して伐倒を行った。

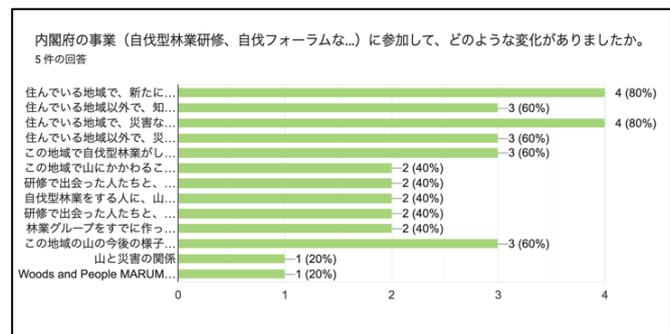
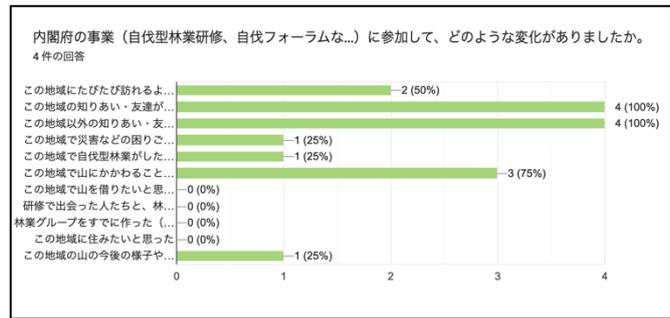
(感想)研修のあいまに、これからしたい生活(それぞれが考える持続可能な生活)などを語り合うなど、林業研修して終わりではなく、人の交流の場にもなっている。知り合ったなかで、気があう人を見つけて、林業の任意団体を立ち上げるなどの動きにつなげていく方向。

●特記事項（アンケート結果）

・参加者に「内閣府事業に参加して変化したこと」をアンケート調査すると（回答数：9件）、**町外からの参加者の4人中3人が「この地域で山にかかわることがしたい」と答え、域外からの関係人口が山を通じて地域に関わろうとする傾向が見られた**（右上图）。

・その一方で、「この地域に住みたい」「この地域で山を借りたい」という声は無く、現時点では地元を持ちながら通おうとする姿勢が現れた。

・同じ内容を町内在住者に質問したところ、**5人全員が「住んでいる地域で、災害などの困りごとが起こったら、研修で得た知識やスキルを使って力になりたいと思うようになった」と回答し、研修を通じてフォーラムと研修に参加したことで山への参入意欲が高まり、住民が主体的に動くきっかけができたことがわかった。**（右下図）



■研修3（熊本県美里町（球磨川流域））

フォーラム参加者が研修にも多く参加した。また、町外からも多くの人 came（町内・延べ4名、町外・延べ31名（うち県外4名））。災害、山の荒廃にこれだけの人の関心がある。研修に来てくれた方々の熱を冷まらずに、継続して関わられるようなイベントの開催が必要だという認識で関係者が合意した。

参加理由などを知るために、以下に聞き取りを行った。

<参加動機についての調査報告>

1. 町外男性：サラリーマン早期退職し、**林業と農業を生業にしたいと、研修に参加。**
2. 熊本市内、女性、鍼灸師：**長年想っていた兼業林家の道を目指し研修に参加。**
3. 町外男性、植木業、特伐個人事業主：道づくりを学びに参加。
4. 男性有機農家：農業だけでは季節の影響を受けすぎるため、**林業でも稼げるようになりたく研修に参加。**
5. 男性会社員：長く勤めている仕事に疑問、転職を機に林業の道を模索。
6. 町外役所職員：**地域の山の整備に関しての危機感から研修に参加。**
7. 南阿蘇村、林業従事者：道つけを勉強に参加。
8. 町外、県職員早期退職者：**林業を生業にするため研修に参加。**
9. 町内男性、森林組合の作業班：自伐での自立を志して参加。
10. 町内女性、農業の派遣をしながら将来を模索、橋本先生の研修に参加後、**自伐の可能性を感じ参加。**
11. 町外男性、整体師：**兼業林家を目指し、研修に参加。**

12. 人吉市の男性：自伐型林業をやる事を決め、研修に参加。相良村出身、熊本初・地元民の自伐の取組みではないか。
13. 町外、竹林整備等する男性：自伐に関心が高まり研修に参加。
14. 延岡から4名の参加：すでに講師の橋本忠久さんの父に習った経験あり。忠久さんの丁寧な説明により、さらに橋本先生の施業方法に合点がいった模様。
15. 町外・トレイルランナー（チームドラゴン）：群馬出身、**実家に山、山の劣化に問題を感じ、自伐型林業の取組に共感**、研修に参加。
16. 八女市の「地域おこし協力隊」女性：道つけを学びに参加。
17. 町外男性：石工など様々な仕事を渡り歩く、**実家に山があり、林業に関心高まり参加**。
18. 町外：素材生産を主とする林業者。道つけを学びに参加。

5.6 活動内容③ 災害ワークショップ(勉強会)開催

(1) 目的と内容

地域推進組織づくりのためのワークショップを開催した。地域における担い手の役割について、参加メンバーが共通認識を持つために行った。

■ワークショップ1

■日時:2021年6月27日

■水上村自伐交流会

石倉交流施設(水上村湯山 299-2)

■参加者

15名

■プログラム

中嶋健造講義(1)「自伐型林業」

溝口隼平さん講義(坂本の活動拠点からのリモート講義)「自伐型林業と生業について」

中嶋健造氏講義(2)「山林崩壊の現地調査報告と現地視察」

15時30分 終了

(所感)コロナのため、人数を制限して行った。県外からの移住者を中心に、この地域で仕事をつくるため、自伐型林業を行いたいという思いを地元の人に話した。地元の人への反応はかなりよく、「若者たちによる自伐型林業をぜひ行ってほしい」、「移住者たちが生き生きして自伐型林業をしていたらもっと県外から移住者が来てくれるかもしれない」などという期待などがでた。また、地元の人たちは過去の災害経験から、山が荒れている、どうにかしたいという実感があつた。

球磨川流域における当事業の関係者は以下の通りに増えつつある。

<関係者>

水上焼畑の会(水上村)、笹本幼児教育研究所グループ(人吉市)、リボーン(八代市)、人吉市医師会(人吉市)、芦北町林研(芦北町)、地元学ネットワーク(水俣市)、美里町役場(美里町)、NHK 熊本放送局

(今後、山江村も巻き込む予定)

・目的:豪雨災害の原因を知る勉強会を開催しながら、その対策(流域治水含めた)として自伐型林業を位置付け、自伐型林業で生業を創出させながら、流域内の地域・自治体を巻き込みながら地域振興と土砂災害防止を両立させる。

・6月には第1回勉強会開催(水上村)し、今後の展開の協議を行った。球磨村と八代市の災害現場調査(NHKを案内)、地元学ネットワークの吉本哲郎氏と今後の展開について協議(重点化する自治体として山江村・住民へのアプローチを強化)、芦北町への展開について林研メンバーとも協議した。

■ワークショップ2

■日時:2021年7月21日 15:00~16:30

■丸森町役場

石倉交流施設(水上村湯山 299-2)

■参加者

丸森町役場職員 8名、あぶくまの里山を守る会、自伐型林業推進協会

■プログラム

15:05~15:25 橋本淳司プレゼン

15:25~16:30 中嶋健造プレゼン

16:30~ 保科丸森町町長と挨拶

プレゼンのあと、役場参加者のコメントや質問が以下のように集まった。

・プレゼンは初めて聞くものばかりで、目から鱗が落ちた。町の7割が森林で山を使って生業をどう作るか、災害をどう防ぐかを農林課で考えていたが、今日、その方法を聞いた。(農林課長)

・質問

- 1)「谷渡(たにわたり)の作業についてもっと詳しく教えてほしい」
- 2)「植林することで20年災害がこわいのをどうすればよいか」(農林課)

・回答:

1)谷の水が道路の上ののって川になり、別のところでおちてしまう。谷の道のつけ方は、つまっても上を流すようにすれば被害を小さくできる。

2)多間伐を行う。皆伐した場合は、3反(ha)以内に留めることを心がける。

・質問

自伐型林業で「地域おこし協力隊」を集めている高知県佐川町の事例を初めて聞いた。移住者が増えると聞いて興味持った。佐川町は山を移住者に提供しているのか?(復興対策室 日下室長)

・回答:山守と山林所有者をマッチングして契約してもらうようにしており、役場が間に入って調整している。地域おこし協力隊は、卒業時に50haを契約(山主所有は1haとか。役場が集約する)、年間収入500万円になる。うち、作業道敷設の補助金2000円/m(県&町)があり、活用して100~200万くらいもらっている。国が1000円ほど上乗せで出してくれるともっといい。

・質問

森林経営管理法、環境譲与税の用途、県でも丸森にいるときいて、町に頼んでいいよというまとまりがあ

ると県としてもやりやすい。佐川町の事例が、まさに考えていたものの事例(山守を 50ha 山林所有者の 8 割が参加)だったので、今日の話は大いに参考になった(県大河原地方振興事務所 林業振興部)

(所感)他の地域の取り組みなどを情報提供することで、丸森町が抱えている課題も次第に明らかになり、どうやって解決していくのか、その糸口を話し合うことができた。地方自治体や地域住民が、自伐型林業に積極的に関わってくれることで、都会の生活を脱して田舎で暮らしたいという若者のニーズを満たすことができる。移住したくても仕事がない、移住するなら自然に触れ合いたい・少しでも環境にいいことをしたいという当団体の会員のニーズを、丸森のような地域が山を提供してくれることで、満たすことができるので、もっとイベントや研修を開くべきと思った。

■ワークショップ 3

■日時:2021 年 9 月 17 日

球磨川ほか(芦北・水俣地区)災害ワークショップについて。水俣市にて「土砂災害と林業」の勉強会をと現地視察会を開催した。地元学ネットワークとともに告知と募集をしたところ、コロナの心配もあったが、移住者や移住希望者、頭石川流域(湯の鶴温泉地区と頭石地区)からの参加者もいれて、約 20 人が参加した。そのため、今後の展開予定地域として、頭石地区の方たちとからの情報も共有できた。

■ワークショップ 4

■日時:2021 年 10 月 19 日

■場所:宮崎県綾町

「地元学ネットワーク」(http://www.mirai-seiji.jp/lecturer/Tetsurou_Yoshimoto.html)の吉本哲郎氏の提案で、宮崎県綾町の地域づくりを主導する民間団体に情報提供し、勉強会を開催した。綾町でも照葉樹林再生に向けた中で、土砂災害防止をどう現実化させるかは課題になっているとのこと。土砂災害を防ぐ林業施業の展開は九州全体の課題であることから、地域の住民と、森林再生に興味がある都市部の方が参加しやすいイベントを今後開催できるように検討中。冬になり、本格的林業シーズンが到来したことで、動きが加速している。

■ワークショップ 5

■日時:2021 年 10 月 28 日

■場所:プリンスホテル軽井沢(長野県)の山林

■参加者

17 名(プリンスホテル関係者)

■プログラム

熊崎一也講師のもと、プリンスホテル関係者が 17 人集まり、広葉樹を中心とした木の特徴や森林の話、チェンソーの取り扱い方の説明・講習を行った。今後、プリンスホテルがどのように自伐型林業に取り組むのか(宿泊者のアクティビティにするのか、自伐の森をネイチャーゾーンとして使うかなど)、多様な人を巻き込んでの活動にできるよう一緒に考えた。

(その他)講師の熊崎一也と地域リーダーの橋本通代。橋本さんは、スノーボード日本代表としてソルトレイク五輪に出場した経歴を持つ。現在は自伐型林業を支援しつつ、森創りを通じた環境活動、アートな森

創りとその活用を通じて環境問題解決に向けてアクション、自然や人、動植物が調和する世界を目指したグループを作り、軽井沢で幅広く活動を始めた。

■ワークショップ 6

■日時:2021 年 11 月 13~14 日

■宮城県丸森町内山林「親林」

■講師:地球守 高田宏臣さん

■参加者:丸森町以外の参加は 13 名、町内は 9 名、不明 4 名の計 26 人

町外の中には仙台市、岩沼市、村田町、角田市、南相馬市などからの参加者含む 参加者の業種は、自治体職員、NPO 関係者、カフェ運営者、農家、美容師、地域おこし協力隊など。

(参加者感想)

- ・ナラ枯れをただの伝染病として終わらせず、その植物のいる環境そのものを「土の中まで含めて環境」として捉える見方を学んだ。
- ・土中の水と空気の動きという視点から、樹木の環境劣化の原因を探り、「木を見て土中を見ず」だった今までを反省した。
- ・中の木の根の深さやその形、水の流れ、菌糸の張り方、匂いの違い、乾き方などを見る目を持つ ・土中環境の教えは自伐型林業の施業と合わせて学ぶと「鬼に金棒」的な感じがする。

■ワークショップ 7

■日時:2022 年 2 月 11~14 日

■熊本県八代市内の山林ほか

■講師:中嶋健造 (自伐型林業推進協会代表理事)

■参加者:約 30 名

人吉フォーラムの講演者のつる詳子さんが顧問を務める団体「チームドラゴン」が、フォーラムを機に連携化。参加者約 30 人で現場視察や勉強会を開催。視察会は八代市の山林でトレイルランコース (登山道) を自伐型林業目線で登山道づくりや修正のアドバイスを行った。

その他に、

①芦北町、山江村、あさぎり町、五木村への派生展開について、人吉フォーラムに参加された高木淳二 (環境圏研究所、捌水塾) 氏と協議

②水俣市展開を地元学ネットワークと協議 (代表の吉本哲郎氏他)。地元具体化展開を「天の製茶園」の天野浩氏 (地元学ネットワークメンバー) が担うことで合意。天野氏はお茶をベースに都市との交流も実施しており、ネットワークが既にある。移住希望者とのネットワークも既があり、仕事斡旋が課題であった。この仕事斡旋を自伐型林業で展開する仕組みをこれか構築していくことで合意した。



5.7 活動内容④ 生業調査

(1) 目的と内容

「農山村には働く場がない」というのは本当なのか。確かに、学校、役場農協、企業や工場などの勤務先は限られている。しかし、農山村には、ナリワイとしての仕事がたくさんある。1つ1つの仕事は小さく収入は少なくても、「半農半 X」などいくつかの仕事を兼ねることでもまとまった収入を得ることができる。そしてそのような田舎の暮らし方が、家庭と仕事のバランスが取れ、さらに年にはない自然に触れ合えると、都市部に住む若者に注目されている。地域の人と都会の消費者とが会うことで、新たな仕事を生み出すこともある。特に近年は災害が頻発しており、災害を起こさないためにも、森林づくりや林業が注目されている。林業であれば、日本の国土は7割が森林であるので、日本全国どの地域でも「半農半 X」ができる。ではその X にはどんなものがあるのだろうか。事業の対象地で、フォーラム・研修に集まった人たち・グループの生業を調べてみた。

① 林業×スポーツアクティビティ（長野県軽井沢町）

《自伐型林業×スノーボーダー》《自伐型林業×ホテルのアクティビティ》

軽井沢は日本有数の避暑地であり、観光地である。冬もその人気は健在で、多くのスキーヤーやスノーボーダーが訪れる。この地域に住む、スノーボード日本代表としてソルトレイク五輪に出場した経歴を持つ、スポーツアスリートの橋本通代さんは、スノーボーダーの視点から、その仲間たちと自伐型林業による森づくりを目指している。何度か開催するにしたいが、だんだん軽井沢プリンス社員と一緒に活動する気運が高まり、同社の幹部クラスや関係会社（ライオンズゲート、THE CO 等）が研修に参加・見学するというところまで関係人口が広がってきた。

② 自伐型林業×山間地の多業（熊本県美里町）

《自伐型林業×鍼灸師》《小規模林業（自伐）×大型林業》《自伐型林業×植木業》《自伐型林業×農業》

《自伐型林業×役場職員》《自伐型林業×整体師》《自伐型林業×竹林整備》

《自伐型林業×「地域おこし協力隊」》《自伐型林業×トレイルランナー》

トレイルラン団体「チームドラゴン」（八代市）のメンバーが、「自分たちが山登りをしているフィールドが、シカの食害や皆伐などで荒れていくのが我慢できない」、「自伐型林業で森林を保全する方法があると

興味を持った」と、次年度、チームドラゴンと連携して自伐型林業研修会を開催することになった。

チームドラゴンでは、令和2年の球磨川大水害以降、山の荒廃を食い止めようと、これまでシカ防護柵設置や荒れた登山道整備の活動を実施してきた。山を持続可能な状態にしていくために、自伐型林業を進めていきたいと、2月12日には災害の発生源となった山の現状とその対策について、山に登ることが少ない方たちにも知ってもらいたいと、当事業のワークショップが企画された。

③ 自伐型林業×大型林業（大分県日田市）

《小さな林業（自伐型林業）×大型林業》

山林所有者と素人からの新規参入者と事業者からの転換者が混ざり合っている。この1年の動きを見ていると10人程度が参入していて、大きな変化がある。今年度は、壊れない作業道を約1km敷設しており、その存在をアピールしている。

6 モデル事業としての成果検証

6.1 事業成果（目標達成状況）

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	フォーラムおよび災害現場参加者 100 人(4 地域合計 400 人)	地域平均約 130 人(3 地合計 約 380 人) + 視察会参加約 40 人 (+オンライン視聴 6,350 回)
2	研修参加者 20 人(フォーラム・災害地視察者の 2 割/合計 80 人)	合計 92 人(のべ 173 人)
3	ステップアップ研修 10 人(研修参加の半数/合計 40 人)	合計 15 人
4	各地 4~5 人が自伐型林業者(半林半 X 実践者)のメンバーとして「地域推進組織」を組織する	2 地域で「地域推進組織」の役割を担う団体が活動を始めた。

6.2 事業成果（関係人口の地域とのかかわり方）

(1) 事業成果

① 関係人口創出に有効な取り組み

・「自伐型林業」に関心を持つ人達が、災害や生態系といった持続可能な暮らしのために期待感を持ってフォーラムに参加し（5.3 活動内容① フォーラム・災害視察会開催 フォーラム2のアンケート等参照）、その後の研修会や視察会にも各地で数十名の参加者があった。

・研修会を開催すると、地域内外から多種多様な業種に関わる人が参加し、環境への意識とともに林業と副業を掛け合わせたライフスタイルを築こうとする声も聞こえた。

・「林業には将来がない」と思っている住民の多い地域でフォーラムを開催し、視察会を繰り返し、地域外の住民(関係人口)が可能性を感じた。その結果、地域内外からは「生業をつくりたい」という意見が多く、域内からの「実家の山をどうにかしたい」「農業を続けながら林業を兼業したい」といった声があり、諦めかけていた山を生かした「もしかしたら未来があるのでは」という意識の変化が現れた。(5.5 研修会の開催「研修 2-2(宮城県丸森町)スキルアップ研修会」アンケート等参照)

② 地元のグループの変化

事業を通じて、主に以下の3地域によって展開の広がり方に変化があった。

・球磨川流域(熊本県)

フォーラムを開催して注目を浴びると、「美里町林研」「芦北町林研」(※)など既存の林業グループが動き出し、さらに地域づくりに力を発揮してきた「水俣地元学ネットワーク」「五木村山村協議会」のほか、トレイルランナーグループ「チームドラゴン」が自治体とのつなぎ役になり、林業の担い手育成の予算や森林活性の関係人口づくりにつながりつつある(球磨川地域)。

※林業研究グループ/全国 16,000 人のメンバー

・丸森町(宮城県)

年配世代が中心メンバーである森林ボランティアグループが本格的に林業をしたいと火が付き、グループ内で協議を重ねて自伐型林業グループを作り、自己資金を集めながら県外者にも呼びかけて育成事業を展開した。

・軽井沢町(長野県)

過去にフォーラムを開催した地域にある観光企業が動き出し、自社の山林を地域住民に広げて研修会を開き、都市部中心の観光客相手に関係人口を増やす取り組みを始めた。

③ 就業者の増加よりも新しい生業の可能性

「自伐型林業」を実際実践するグループは3地域(丸森町、軽井沢、球磨川流域)で、球磨川流域においては自治体も巻き込み、今後の就業者の増加に期待ができる進展があった。しかし、就業者の増加としては、一年間では限られた結果しか生み出せなかった。

一方で、自伐型林業に取り組もうとする参入者の「生業」調査をしたところ、新規参入者は林業とは別の仕事を持っていた。環境意識が高く、新しいライフスタイルを築こうとする人たちの可能性が高まっていることがわかった。

6.3 事業成果（その他）

（1）オンラインの効果

新型コロナウイルス感染が収まることはないと思いき、当初からオンラインを中心にフォーラムの配信や情報発信を心がけていたところ、視聴者数が 2000 回を超えるほどにもなった。やみくもに発信をしても効果は薄いかもしれないが、次に上げる既存メディアへの発信とも重ねると効果は上がる。

また、地域グループとの打ち合わせがオンラインで複数回重ねられるため、密なコンタクトで計画通り実施できるようになった

（2）既存メディアの効果

今回の事業では「広報・アプローチ」（5.2）で報告したように、大手メディアの取材対応が地域住民への変化を及ぼした。特に議会や自治体がワークショップ・勉強会に積極的になり、事業完了後にも地域住民が研修を重ねられるようなところまで道筋が見えるようになった。

6.4 本年度の課題と対応

（1）成果を生み出すまでのアプローチの工夫分析

① 地元グループ（地域推進組織になりうる団体）づくりの流れ

「自伐型林業」という一見すると入り口の狭い分野のプロジェクトを進めるには、企画立案者である当会のアイデアや計画を多くの人に話し、共感を得て、それを一緒に実行してくれる地元人を探すことが成功のポイントであった。

各地で事業を展開し、以下のようなアプローチが自伐型林業による生業づくりに不可欠な地元グループ（地域推進組織）づくりの流れになった。

（ア）プロジェクトの青写真を描く

↓

（イ）出会いのためのフォーラムを開催（多くの人を集め、共感を得て、必要な人材を確保する。SNSなどでつながる）

↓

（ウ）視察会の開催（自伐林業とは真逆の現場（災害現場）を視察し、自伐型林業が持続可能な林業なのか納得してもらう）

↓

（エ）研修会の開催（フォーラムや視察会にきた人たちにアプローチし実際に自伐型林業をしてもら

う。複数回行うことで、林業スキルを上げるとともに、参加者同士の交流を深める)

↓

(オ)地元グループの形成 (多様なスキルを持つ仲間集め)

↓

(カ)多様な活動が生まれ、地域独自スタイル進化 (トレイルラン、議員、お茶屋、ホテル、地域おこし協力隊、役場職員などからなる「それぞれができることを掛け合わせ、林業をしていく」スタイルの形成)

② 意識の変革

多くのスキルと経験のある人を集めたかったので、金銭的な条件に加えて「自伐型林業プロジェクトを通じて、地域の山や自分の人生を意義あるものにできる」という感覚を持たせるようにした。

③ 「共感」と「理解」

またリーダーに情熱がないと人は付いてきてはくれないため、「共感」と「理解」を得られるように事業を進めた。仲間集めの相手は、移住者であったり、地元民であったり、他地域から興味があつてきている人たちであり、それぞれの価値観や人生設計を持っている上で、このプロジェクトに参加してくれるので、そこを大切にしながら進めるように工夫した。

6.5 今後の事業のあり方

一つ一つのイベントの中で、思わぬ関係人口の創出のヒントが隠されている気がした。一例を上げると食事、フォーラムの際に地元住民が食事を作って持ってきてくれること(球磨川フォーラム記録参照)、地元住民が開催する研修会で用意した昼食が地元食材をふんだんに使っていて「おもてなし」をしていた。事業の KPI は大事だが、その数字を一所懸命に追うことで余裕がなくなり、そのヒントを見逃している気がする。事務局スタッフの人件費に余裕をもたせて、可能性のキャッチができるとよいと一年を通じて感じた。

7 自立化・自走化の検討

7.1 関係人口を生む研修体制の自立化・自走化

・自治体や既存グループにつなげる 林業に関心がまったくない地域に変化が及ぼすことができるのは証明できた。その後に各地が研修を続けて、森林を守る担い手を育成できるかどうかは、事業成果(6.2)で現れたような、自治体が動くこと、既存グループに変化がでること、そして企業が自分たちで予算をつけることで将来的な道筋が見える。

ここで大事なものは、地域グループ側の事務局体制である。一人が熱心に動いていても、報告が上がってこない、トラブルがあっても対処できない、受付対応だけでもままならなくなる。林業の担い手育成も大事だが、地域グループの事務局メンバーを育成する取り組みも、当事業のような一次産業の担い手育成には必要である。

・思わぬ自立化の事例 地域の変化から、大手企業である「軽井沢プリンスホテル」が乗り出したのは関係人口の創出に向けた大きな変化だった。以下のニュースリリース(2021年7月)が参考資料で、
<https://www.princehotels.co.jp/file.jsp?id=351599&fbclid=IwAR0XwBiErjE68-4e0tY3Kyvn57PinBxBDB69ty-0NJs5r6f2vf0Wr66JUUrU>

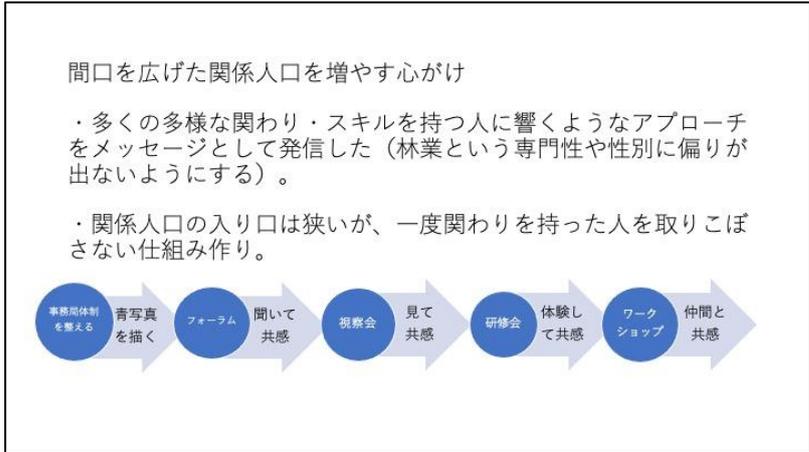
6月に協議を重ねて研修を始めている動きから、自社でオリジナルの環境商品を作り出した。新しい自然体験プログラムとして、8月には20人の外資系社員の研修(SDGs関連)を受け入れ、当会は講師役として山林の案内と座学を行った。社員は都市部出身で、ヘルメットをつける、のこぎりをつかむだけでも喜んでいて、災害に強い自伐型林業の森で、家族を連れて参加する芽が出るような形となった。

8 他地域への横展開の可能性の検討

8.1 他地域展開・横展開にむけて

・当事業を通して見えたものとして、環境意識が高い「自伐型林業」の希望者は、入り口が狭いがフォーラムからワークショップの流れを踏むことが基本の流れで、一度関わりを持った人を取りこぼさない仕組みに貢献し、関係人口創出・拡大に向けて有効な手になることがわかった。

・「自伐型林業」自体が専門的であるため、狭い世界に閉じこもらないような心がけが必要である。右図のように、心がけを持ちながらフォーラムや視察会などそれぞれの段階で役割を整理して、展開することで、他地域展開にも活かせる(6.4にも展開の流れを記載)。



8.2 他地域展開・横展開にむけて

・関係人口集めの受け皿となる地域推進組織のリーダーには、ブレない情熱が必要である。

・そのためにも、どの地域でも知識を共有し、関心を共にできる仲間が集う場（フォーラム）を開催して仲間集めを行うのがベスト。当事業でも、その後小さな交流会、ソーシャルメディアで繋がって交流を深めたことがヒントになる。



・リーダーに情熱がないと人は付いてきてはくれず、「共感」と「理解」を得られるような工夫が必要。仲間集めの相手は、移住者であったり、地元民であったり、他地域から興味があっけてきている人たちなので、それぞれの価値観や人生設計を持っている上で、このプロジェクトに参加してくれるので、そこを大切にしながら進めるのが横展開の秘訣となる。